

Editor's eye

・特集・ 血管性腫瘍

編集担当 浅井 俊弥

動画 Editor's eye
を始めました。

下記よりアクセスください。

<https://vimeo.com/518012278>



今回の特集は血管性腫瘍を取り上げた。脈管異常の分類はThe International Society for the Study of Vascular Anomalies (ISSVA)によって整理され、脈管系腫瘍 (vascular tumors) と脈管奇形 (vascular malformations) に大別された。一般の臨床医にもなじみのある蕁状血管腫が偶然にも併用されたプロプラノロールの内服によって消失したことから、蕁状血管腫は治療可能な血管の良性腫瘍という位置づけになり、多くの症例で投与されている。ISSVA分類には驚くほど多くの疾患が網羅されていて、その中には稀少疾患や難病に指定されている疾患が含まれているのだが、皮膚科の学会等で報告されている疾患には限りがある。また脈管奇形の多くは外科的治療や放射線科医によるinterventionが選択されていて、皮膚科が長く経過をみたり、治療に深くかかわることは少ないが、ISSVA分類を知ることも本号の目的の1つであると考えている。

読者には、まず、村上富美子先生の「Topics」を一読していただきたい。乳児の血管腫のうち、出生時にすでに病変が完成している先天性血管腫にはプロプラノロールが無効であり、乳児血管腫 (かつての蕁状血管腫) と鑑別が必要であることを知った。乳児血管腫に対するプロプラノロールによる治療を選択する基準や治療法の詳細や治療上注意すべき点については、本誌editorの馬場直子先生が「総説」で多くの臨床経験をまとめてくださった。

良性の血管系腫瘍に関しては、一般の皮膚科医が遭遇する可能性がある臨床例をいくつか報告していただいた。診断の参考になれば幸いである。ISSVA分類の中で局所浸潤性ないし良性と悪性の境界型と位置づけられているKaposi肉腫、Kaposi肉腫様血管内皮腫の症例報告は、それぞれの疾患概念を知るうえでも重要であるのでご一読いただきたい。血管肉腫についての症例も集まった。頭皮以外に原発した西平ら、横山らの症例の報告のほか、TTN遺伝子変異とそれがコードする蛋白質の発現を解析した米倉らの報告(「統計」)も興味深い。そして、原発巣および転移巣に対する治療戦略についての増澤ら、荒木らの報告も、実際の臨床現場で参考にしていきたいと思う。